



Title	九州の企業家麻生太吉の産業統治
Author(s)	新鞍, 拓生
Citation	大阪大学, 2023, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/95916
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名 (新鞍拓生)

論文題名

九州の企業家麻生太吉の産業統治

論文内容の要旨

本論文は、福岡県筑豊地方を拠点とする九州地方の有力企業家である麻生太吉（1857～1933）が、石炭、電力というふたつの地域独占的なエネルギー資源産業を対象に、民間による産業の自治的統制を基本とした人為的な管理を志向し、究極的には国家に奉仕しようとした活動を明らかにする。本論文の構成は「はじめに」、第1部「筑豊地方を中心とした石炭業統制」（第1～第3章および補論（1）・（2））、第2部「九州地方電力業での活動」（第4～8章および補論（1）・（2））、「おわりに」である。なお第3章と第8章はそれぞれ第1部、第2部のまとめである。

「はじめに」では、麻生太吉の伝記（『麻生太吉伝』）の記述を手がかりに、企業家の活動における公益性や社会性の付与如何、および、地方企業家が活動の対象とする地域との関わり方について、関連すると思われる先行研究を整理する。それをふまえ、本論文で麻生の活動を考察する上での留意点を示す。そのうえで、ふたつのエネルギー産業の統治、九州地方産業経済の概要に関するこれまでの成果を梗概し、最後に本論文の構成を述べる。

「石炭業統制論」を論じた第1章では、鉱利の保護・延命を目的とする統制論の発展と、麻生太吉のそれに関する言説を示す。第1節では、企業間協調の気運が顕在化した明治30年代から麻生太吉死去後の昭和10年までを目処に、日本石炭業の輸出産業から内需産業への転換、およびその主要因を概観する。第2節では、筑豊炭業界において明治30年代後半に台頭した生産と販売の一体的統制論、およびそれに対する鉱業行政・石炭政策の不在を明らかにする。第3節では、統制の実現に必要な需給権衡を妨げる不安定要因（中小炭鉱および一部販売市場）と、産業の自治的統制の方法（人為的調節、自然淘汰）について、それぞれ言及する。最後に第4節では、麻生太吉の統制論を、彼の言説から明らかにする。

実際の麻生太吉の活動をみた第2章「麻生太吉のカルテル活動」では、日本石炭業特に筑豊石炭業が急速に発展しつつも、人為的管理、統制の必要性が語られるようになった大正前期まで（第1節）と、国内外で新たな炭鉱開発（北海道、撫順）が始まり、一方で筑豊石炭業が老境に入り、その人為的な管理が実際に図られはじめた大正後期以降（第2～4節）に大別して記述する。特に後者の時期は、麻生が他の筑豊地場炭鉱経営者とともに、鉱利保護の観点から全国的な生産制限（送炭制限）を実現させ、かつ石炭鉱業聯合会会長としてその継続に取り組み、さらには筑豊地方中小炭鉱経営者により引き起こされた撫順炭輸入阻止運動の調停と、生産と販売の連係成立に尽力した時期（昭和7年）を対象としており、本章における記述の中心となる。

第1部補論（1）では、撫順炭輸入阻止運動を引き起こした筑豊地方中小炭鉱の経営の不安定さを、炭鉱・鉱区の移動状況、および中小経営者の供給源のひとつである下請業者のありようからうかがう。同補論（2）では、昭和恐慌期、麻生太吉とともに筑豊炭田合同の実現を目指し活動した福岡県知事松本学の、該運動への関わりを明らかにする。

第4章「九州水力電気社長としての麻生太吉」では、第2部の前提となる考察であり、麻生太吉の九水社長時代（昭和3～8年）の活動を明らかにする。ここでは、事業展開や役員人事、電気事業に対する考え方

といった、一般的な経営に係わる事柄（第1～4節）のほかに、地域との関係に係わる事柄、すなわち、本社の東京市から福岡市への移転を通じた名実共の地元企業化（第5節）、産炭地を有し、かつ水力資源も包蔵する九州地方の特性をふまえた活動（第6節）、電気の供給態勢構築を通じた農業・農村疲弊対策（第7節）、および昭和初期問題となった電灯料値下げ問題への対応（第8節）などが明らかにされる。

第5章「九州地方の電力統制と麻生太吉」では、麻生太吉による、九水を通じた九州地方電力業の管理志向と実際の活動を明らかにする。特に、逓信省による電気行政と麻生太吉の活動如何は、彼の活動の公益性の濃淡に係わる事柄であり、それらに関連する事項が究明される。すなわち、電力統制を目指した逓信省特に熊本逓信局の電気行政との関連（第1節）、他社の合併あるいは関係会社化等による一元的管理態勢の構築（第2節）、サイクル共通化あるいは変換器設置を通じた八幡製鉄所の九水50サイクル電力経済圏への包摂運動（第3節）、異系統（60サイクル電力経済圏）である三井財閥・熊本電気の独断専行による、共同火力発電所の企図に対する、九州地方全体の電力統制（逓信当局による電気行政とそれに相応する企業間協調）への引き戻し（第4節）、を明らかにする。

電力業をきっかけとする地域と地方企業家との関係を論じた「電力企業家麻生太吉と地域」は、麻生太吉の活動実態に合わせ、福岡市域（同市および周辺地域、第6章）と大分県域（第7章）のそれが明らかにされる。両章では、電力業をきっかけとして、どのような形（経済的、政治的、社会的活動）で地域と係わったかについて、その有無、濃淡を明らかにする。具体的には、電力業に関する事柄（電源開発、販路開拓など）のみならず、地域での会社企業設立、それら経済的活動との関連での政治的活動、地域に対する寄付を通じた社会的活動の有無、が明らかにされる。

第2部の補論（1）では、地域に対する活動事例として、大分県別府温泉地帯での活動を、寄付行為と、同地の特性を生かした土地経営からうかがう。補論（2）では、大正期を事例に、九水の主要発電地であり、また麻生も株式所有や経営への参画を通じ係わった、大分県内における株式会社企業役員と政党所属の有無、政党所属が会社企業に与えた影響など明らかにする。

最後の「おわりに」では、本書で明らかにした麻生太吉の石炭、電力両産業での活動について、そこでの公益性や社会性の付与如何、それを通じた地域の維持・発展志向、地域との関わり方の如何などを総括する。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (新 鞍 拓 生)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 教授 廣田 誠
	副 査 教授 ばん澤 歩
	副 査 講師 佐藤 秀昭

論文審査の結果の要旨

新鞍拓生氏の提出博士論文「九州の企業家麻生太吉の産業統治」は、すでに1029頁の大著（『九州の企業家麻生太吉の産業統治』一粒書房，2022.9）として刊行済みであるが、その内容についても当該研究分野の発展に貢献するところ大であるため、審査委員会において論文博士として博士の学位を与えるに値するものと認められた。

新鞍氏はその前著（『筑豊鉱業主麻生太吉の企業家史』裏山書房，2010年9月，1,007頁）において、麻生太吉の企業家人生の足跡を、石炭業での経営発展と、電力業への進出および九州水力電気（九水）での企業者活動を中心に描いた。石炭業では第一次世界大戦後に結ばれていた生産あるいは販売のカルテルが麻生系石炭企業へ与えた影響を、また電力業では麻生の九水取締役就任（1913年）から社長就任以前、すなわち水力発電の開発が進み、あるいは「電力戦」に象徴される激しい企業間競争がみられた昭和初年までの九州地方所在有力電力企業の協調への取り組みについて、それぞれ明らかにした。本論文はそれらをふまえ、太吉が関係したふたつの地域独占的なエネルギー産業（石炭と電力）ので産業統治活動を明らかにしたが、その際二つの点に留意した。一つは太吉に関する二つの伝記のうち『麻生太吉伝』が強調する公益的・社会的側面を重視した産業統治であり、いま一つは九州への拘り、すなわち彼の企業者活動、産業統治を通じた地域の維持、発展への志向である。

本論文でいう産業統治とは、企業や企業家が、政治権力や法、官僚機構からの干渉をなるべく受けない形で、あるいは逆に必要と思われる施策の不在を対処、克服する形で、産業の維持、発展のための活動を協調的かつ自律的に行うという、いわゆる産業の自治的統制を意味する。また本論文が考察の対象とする時期は、太吉の活動実態をふまえ、経済統制や産業の組織化が注目されるようになった昭和初期以降のみならず、明治・大正期をも含む。石炭と電力はいずれも、社会経済にエネルギーや原材料を供給し、かつそれぞれ地域独占的な性質を持つ産業として、地域に所在する各種産業や企業の発展、雇用、資本形成などを通じ、国家経済や地方経済に影響を与え得る産業で、またこの両産業は競合する側面とともに相互補完的な側面を合せ持つ。太吉は、戦前期の日本国内で最大のシェアを誇る産炭地・筑豊地方を中心に、その近代的発展の初期から、同炭田の老境が指摘された昭和初期まで、生涯を通じ石炭業への関与を続けた。また太吉は炭鉱への電力供給の形で関与を始めた電力業でも、長距離高圧送電を軸に「電力経済圏」が成立する大正期以降、水力を中心に九州地方で電力業に生涯関与した。そして太吉は、「有限」な石炭と「無限」の水力、それぞれの特性をふまえ、安定した供給基盤を構築し、またその産業統治は、石炭業では日本全体に、電力業では九州地方において、それぞれ影響を与えるものとなった。

以上のような内容を有する本論文は、石炭・電力各産業に関する、またさまざまな産業における業界による自主的統制に関する経済史・経営史的研究においてこれを大きく前進させたものとして高く評価でき、「博士（経済学）」の学位に値するものと考えられる。